「おお、広いな！」
「そうだね、弘樹おじさん」
今年、小六になったばかりの美少女、月城環奈は子供らしいか明るい声で、隣りに立つ冴えないおじさんに相槌を打った。
全裸の二人は並んで露天風呂を見渡す。世間一般でいう自分の子でもおかしくないほど年の離れた少女と男は温泉に来たのだ。
「来て良かっただろ？環奈ちゃん」
「うん。でも、環奈はおじさんと二人きりに会えることが、一番嬉しいよ」
「か、環奈ちゃん・・・」
おじさんこと月城弘樹は奮発して高級な部屋をとった、この施設は芸能

人がお忍びで来るほどの温泉宿で、誰にも会わずにチェックインが出来る仕様になっている。
いわば、隠れの宿と呼ばれる部類のホテルなのだ。
和と洋を基調とした室内に源水掛け流しの露天風呂が付いていた。
プライバシーの守られた温泉宿で心置きなく環奈と楽しめるというわけだ。
「いやん！おじさんのオチンチン・・・」
環奈は弘樹の股間が大きく勃起したことに気付く。
「ご、ごめん環奈ちゃんが可愛いことをいうから」
前屈みになり申し訳なさそうに謝るおじさん。
しかし、環奈にはそんな姿も愛おしく思えた。
「クス、いいんだよ。おじさん。環奈で興奮してくれてありがとう」
「環奈ちゃん・・・」
環奈の言葉に感動するおじさん。すると、環奈の方から唇を重ねた。

「ちゅっ♡」
そして、おじさんの大きな手を掴み自らの胸に持っていく。
その胸はまだ発展途上ではあるが、それでも少女特有の柔らかさがあった。
「‥‥じゃっ温泉に浸かろうか」
おじさんは慌てて、少女か話題を変えるように離れる。
二人は並んで温泉に浸かると大きくため息をついた。
「はぁ、気持ちいい」
「日頃の疲れが取れるよ・・・」
のんびりとした時間が流れていく。
弘樹と環奈は関係はというと、恋人同士である。
だが、二人が付き合っていることは、誰にも知られてはいけないのは当然のことで、もしバレたら弘樹は即行で捕まるだろう。
環奈は自分の実の姉の娘で、環奈の母親が多忙であるためこうして弘樹

がときどき預かることがあった。
少女がむさ苦しいおじさんなんかに慕ってくれるだけでも、感激物だがどう言うわけか、
環奈の方から弘樹に告白してきたのだ。
弘樹はからからかわれているのだろうと最初は相手にしていなかったが、少女の本気のアプローチに次第に本気なのだと分かった。
しかし、実の姉の娘に告白されたからといって付き合う訳にはならない。
環奈を自分から遠ざけるようにあしらったこともあったが、環奈に泣かれ結局、環奈の可憐な可愛さと押しに根負けしてしまい恋人関係になったのだった。